

P1~3	企画展 村の古地図 —志賀地域を歩く—
P4	ミニ企画展 大津絵れきはく蔵出し展
P5	学芸員のノートから
P6	ミニ企画展 大津の仏教文化17 西教寺の仏画Ⅱ

第72回企画展

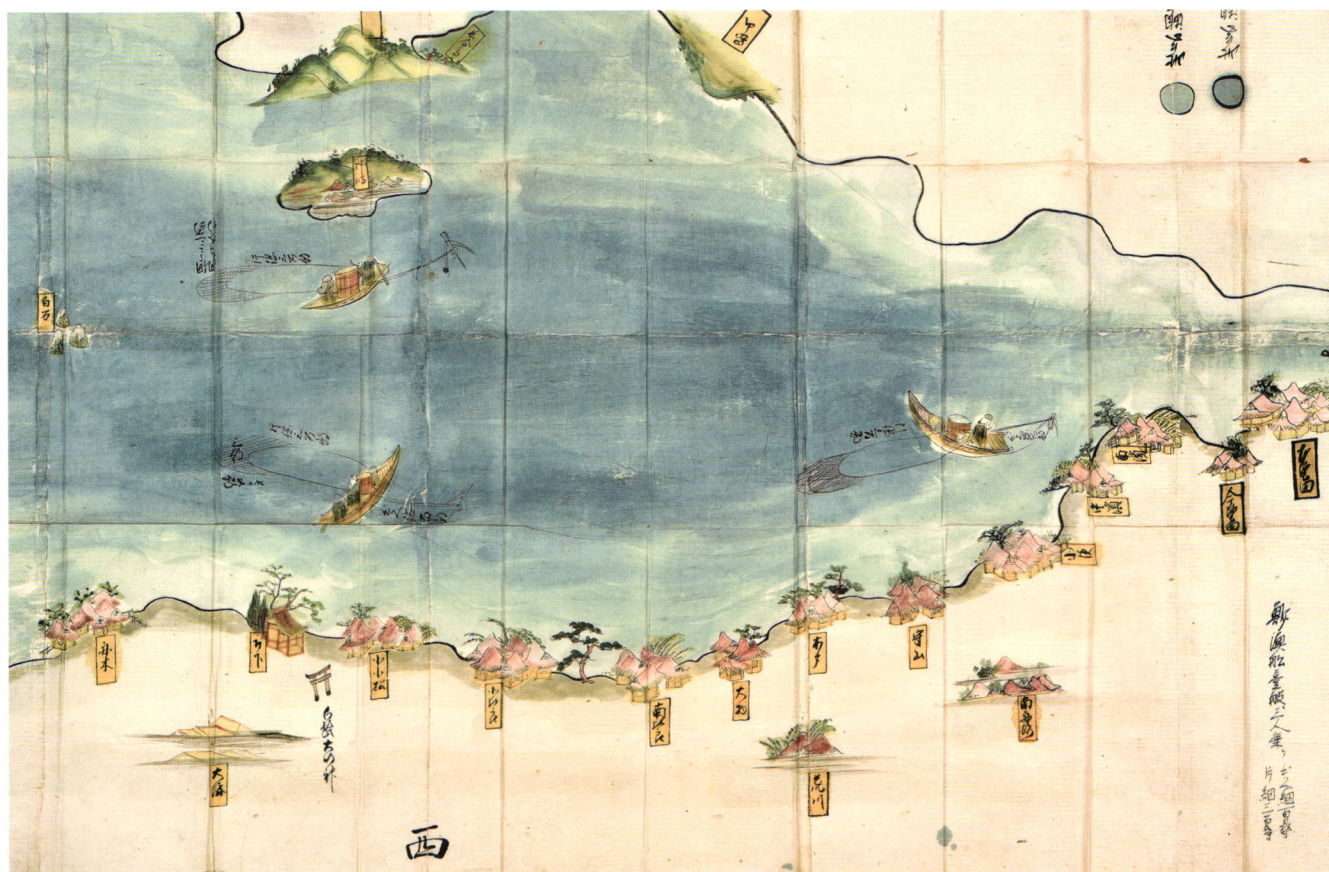
志賀町・大津市合併10周年記念

村の古地図

— 志賀地域を歩く —

平成29年3月4日(土)～3月26日(日)

【休館日:6日(月)・13日(月)・21日(火)】



鮎漁村々絵図(部分) 江戸時代 和邇北浜自治会蔵 1鋪

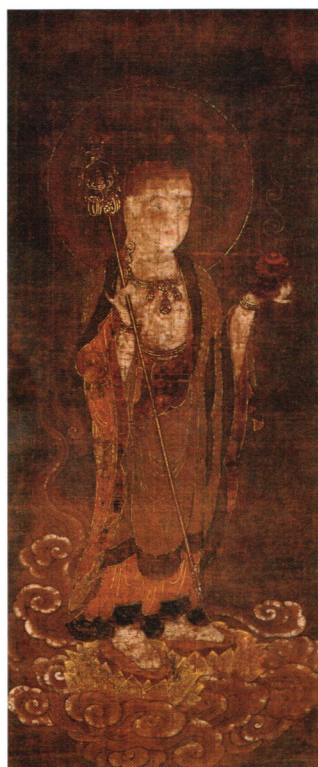
鮎漁に関する琵琶湖北部の村々(浦)を描いたものです。村や湖が彩やかに表現され、その中に志賀地域の村々も含まれています。漁業を通じて多くの村々のつながりがわかる絵図です。

大津の仏教文化17 西教寺の仏画Ⅱ

会期：平成29年1月17日（火）～3月5日（日）
【休館日：月曜日】

戒光山西教寺は、比叡山の東麓の坂本五丁目にある天台真盛宗総本山です。聖徳太子の建立という伝承を持ち、平安時代には慈恵大師良源が復興して念仏道場とし、鎌倉時代に恵鎮上人がここで大乘円頓戒を復興するなどして興隆しました。室町時代の文明18年（1486）、延暦寺横川の僧侶に請われて真盛上人が西教寺に入寺。不断念仏の道場とし、戒律と念仏を重視した独自の教義に沿った念仏集団として多くの弟子が輩出しました。

本展は、平成24年に開催した「大津の仏教文化12 西教寺の仏画」の第2弾です。西教寺に残る大量の未指定の絵画のなかから、前回展示できなかった仏画を展示します。本展により、西教寺の奥深さを感じていただけたら幸いです。



絹本着色地藏菩薩像
室町時代 西教寺蔵



絹本着色虚空蔵菩薩像
南北朝時代 西教寺蔵



絹本着色毘沙門天像
室町時代 西教寺蔵

ご利用案内



交通機関

- 京阪電鉄石山坂本線別所駅 徒歩5分
- JR 大津駅 徒歩15分

駐車場 約70台（無料）

■常設展示観覧料

区分	個人	団体(15名以上)
一般	320円	250円
高校生・大学生	240円	190円
小学生・中学生	160円	120円

- ◆大津市内在住の65歳以上の方は一般料金の半額。
- ◆市内在住の障害者の方、市内在住の介護保険の要介護者の方・要支援者の方は無料（証明するものをご提示ください）。
- ◆ミニ企画展は、常設展観覧料でご覧いただけます。
- ◆企画展の観覧料については、その都度定めます。

■開館時間

午前9時～午後5時（展示室への入場は午後4時30分まで）

■休館日

月曜日（祝日・振替休日の場合は開館し、翌日が休館）
祝日の翌日（土・日曜日の場合は開館）
年末年始（12月27日～1月5日）
その他、業務の都合により休館する場合があります。

—— 歴博カードのご案内 ——

当館主催の展覧会を自由にご観覧いただける定期観覧券です。また、当館発行の出版物や催し物の割引、様々な情報のご案内など、多くの特典を設けております。（1年間有効）

料金	一般	高大学	小中学
	2,000円	1,500円	1,000円

★詳しくは博物館までお問い合わせ下さい。



大津市歴史博物館

〒520-0037 滋賀県大津市御陵町2番2号
TEL 077-521-2100 FAX 077-521-2666
<http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

企画展

村の古地図 —志賀地域を歩く—

平成29年3月4日(土)～3月26日(日)

和邇・木戸・小松各地域に残る古地図を結集！
集落域や山や川、湖岸の景観の移り変わりを紹介！

平成28年3月で、志賀町と大津市が合併をして10年が経ちました。本展はそれを記念し、志賀地域にあたる和邇・木戸・小松学区各地域に残る、江戸時代から明治時代にかけての村や自然の景観を描き込んだ古地図を展示し、その移り変わりを紹介します。

私たちの目の前にひろがる地域の景観は、人々が生活のために家や道を作り、山や川は開発や災害などによってたえず変化し続けてきました。志賀地域は、比良山系の山並みと琵琶湖の豊かな自然に包まれ、江戸時代においては、各村が生業（農業や漁業など）を通じて密接に結びつき、また北国海道を通じて多くの人々が行き来していました。私たちは、過去の景観や人々の暮らしの様子を実際に見ることはできませんが、その時々描かれた古地図からその一端をうかがい知ることができます。

志賀地域に残る共有資料（古文書・古地図）は、平成17年に刊行が完結した『志賀町史』編纂時に調査・整理され、現在では地元の歴史に関わる資料として、毎年の中干しなどを通じて次世代に守り継ぐために大切に保管されています。この中で古地図をみると、江戸時代の検地に際して作成された絵図や、村々による山林や河川の共同管理、また境界争いの際に領主（幕府や大名）から下された裁許絵図、さらには明治時代の地租改正に伴って作られた地籍図など内容豊かな古地図が残されています。それら古地図の作成目的は、時代や状況により異なりますが、細部をよく眺めていくと、田畑や山林だけでなく、先人の暮らしに関わる生活空間や用水、道、寺院や神社の位置など、現在につながるかつての景観が描かれているのです。

本展では、江戸時代の志賀地域の村々の絵図や、明治時代の地籍図を展示し、各時代の地域の様子をご覧ください。いつもの企画展とは違い、会期は1ヶ月弱と短いので、どうぞお見逃しなく！

【インフォメーション】

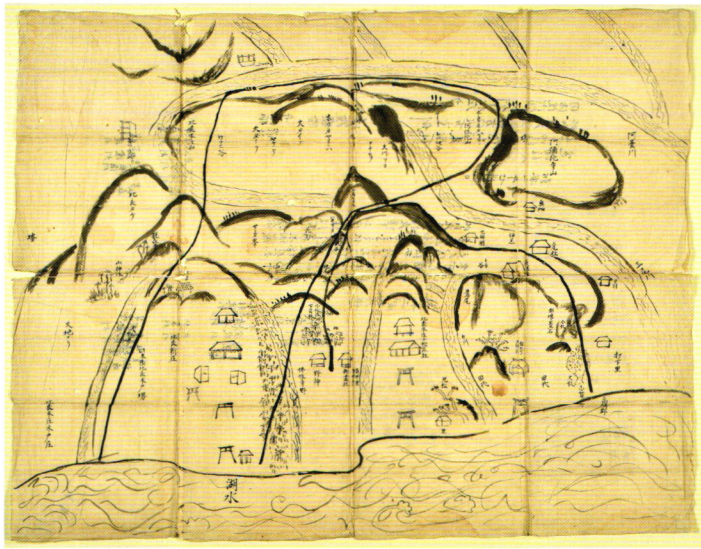
会場：大津市歴史博物館 2階企画展示室 B 【休館日：6日(月)・13日(月)・21日(火)】

観覧料：常設展示観覧料

※会期中、博物館で展示する古地図の写真パネルを、下記の各ロビー等で厳選して展示します。

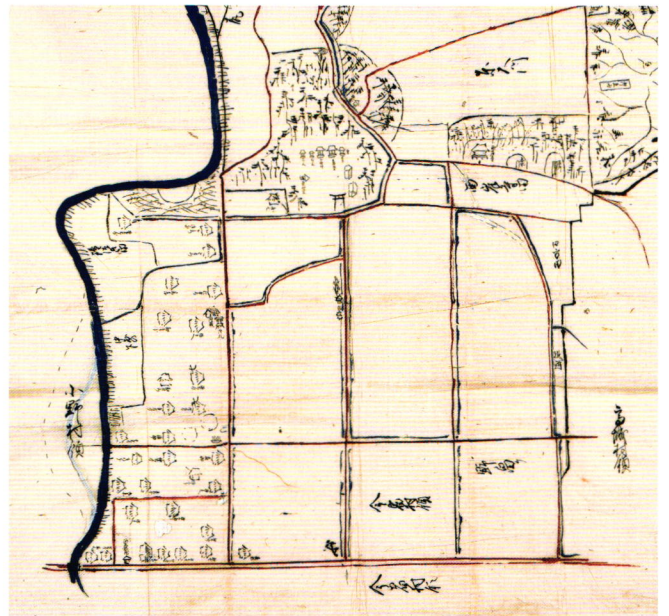
和邇文化センター（大津市和邇高城12）【休館日：6日(月)・13日(月)・21日(火)】

木戸支所（大津市木戸58）【休館日：土日祝】



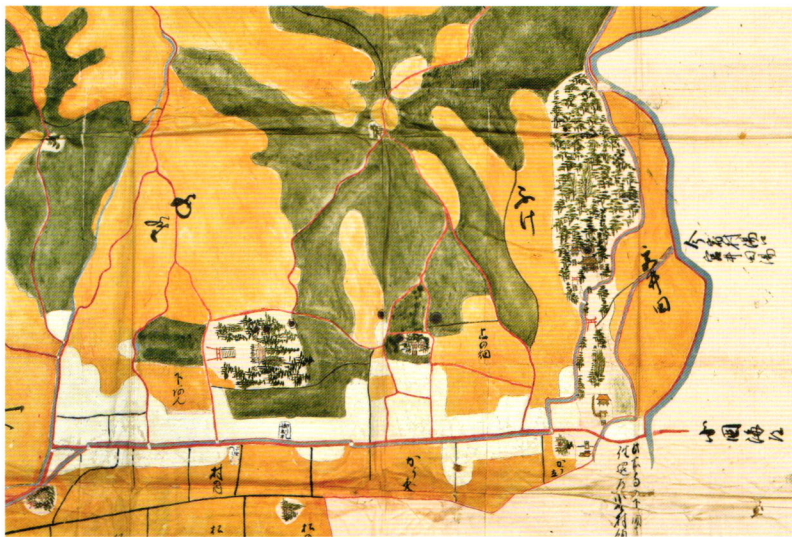
比良庄絵図写 江戸時代 1鋪 南比良共有財産管理会蔵

弘安3年（1280）、小松庄・音羽庄と比良新庄の境目争論の際に作成され、永和2年（1376）の争論で再び使用された絵図の写しです。上（西）を比良山系、下（東）を琵琶湖、右（北）を三尾川、左（南）を木戸庄とする構図で、山川、建物が描かれています。また、墨線（長靴をひっくり返した形）は、比良庄の範囲を示しています。



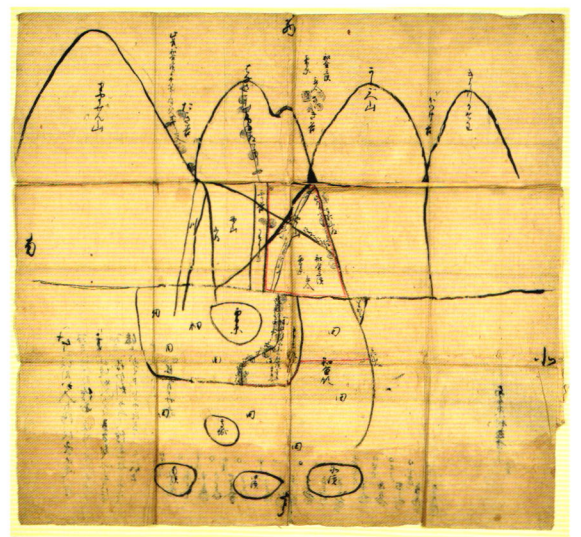
和邇中村絵図 江戸時代 1鋪 和邇中財産管理委員会蔵（部分）

牛頭天王社（天皇神社）内の摂社や神宮寺、集落域、さらには権現山までを描き込みます。現在の榎の碑のあたりに榎（一里塚）も描かれています。



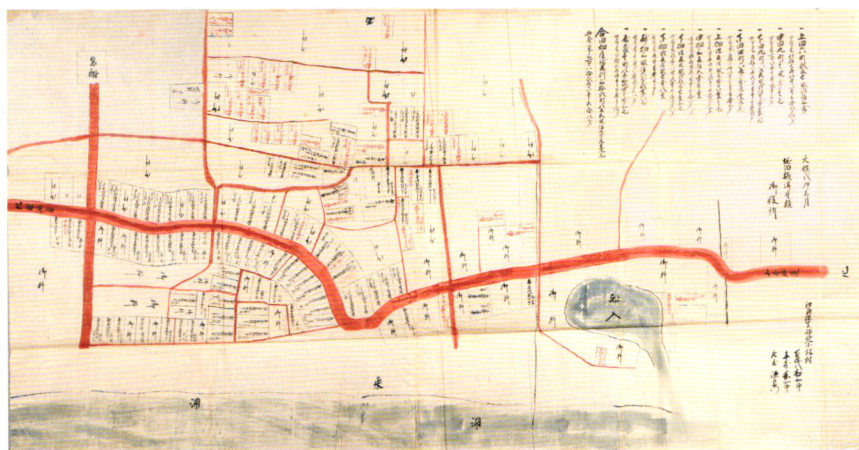
小野村絵図 江戸時代 1鋪 小野財産区蔵（部分）

小野村の集落域を白色、北国海道を赤色で示し、周辺に樹木で覆われた小野神社・小野道風神社・小野篁神社のほか、山並みを描きます。小野妹子伝承で知られる地域の江戸時代の様子を知る絵図です。



霊仙山他山論絵図 寛永6年（1629） 1鋪 栗原自治会蔵

栗原・北浜・中浜・南浜・高城の村々が、霊仙山などの共有山の境目を確定した際に作成した絵図です。裏書に署名した各村代表者と仲介者が、絵図表の境目それぞれに印鑑を押して確認した様子がわかります。



北小松村絵図 天保14年（1831） 1鋪 北小松自治会蔵

天保2年、北小松村（幕府領）の一部が堀田家領（下野国佐野藩）として編入された際に、村役人から佐野藩に提出された絵図の写しです。北国海道（赤色）の東西に広がる北小松村の屋敷地を中心に描いた絵図で、「御料」は幕府領を示し、それ以外が佐野藩領だと考えられます。相給村落（一つの村に領主が複数いる村）の様子がよくわかります。

大津絵 れきはく蔵出し展

会期：4月11日（火）～5月21日（日）

【休館日：月曜日】

展示コーナー

宗教画時代－マジメ路線から庶民派へ－

大津絵の美人画－美人こそ教訓の種－

武者－顔はかわいく、願いは真顔で－

動物たちも大津絵化

メディア・エンタメの大津絵－キャラクターとして活躍－

大津絵は、江戸時代を通じて大津の代表的な名産でした。当時の日本各地における土産物番付でも、西の前頭にあげられています。大津絵が売り始められたのは、東海道の整備が始まった江戸時代初期と推定され、寛文元年（1661）の文献に確認することができます。

その当初は、もっぱら仏画が描かれていましたが、土産物競争の中で、大津絵もその性格を変化させていきます。それは、浮世絵や絵本の流行に歩調を合わせた大衆化路線でした。江戸時代中・後期には、美人画や役者絵的な画題をはじめ、動物や鬼を擬人化させて滑稽に描く風刺画などにヴァリエーションを広げ、様々なキャラクターを登場させ、旅人の心をつかんでいきました。さらに、同時代の浄瑠璃や謡曲、出版物などにも取り上げられ、人気はますます全国区になっていきました。

本展では、歴史博物館の収蔵品を一気に公開し、初期大津絵にみる、本格的な絵師とみまがう表現から、制作・販売上の戦略で、大胆に簡略化されてコミカルな造形となった作品に至るまで、約50点展示します。また、大津絵キャラクターに込められた風刺や滑稽、教訓、護符の意味を解説し、大津絵的なおかしみ、愛らしさの裏にある江戸文化についても、あわせて紹介いたします。



鬼念仏



藤娘



松に鷹

コスプレ忠臣蔵？ いえいえ見立て遊びです。

大津絵見立忠臣蔵七段目図 きばいてい 紀樺亭筆 本館蔵

紀樺亭（1734-1810）は、与謝蕪村の門人。天明2年（1882）には、蕪村とともに文化人ランキング『平安人物志』画之部にランクインした文人画家です。しかし、その6年後、大火事で焼け出され、同門の大津石川町長寿寺の僧、龍賀を頼って大津に移住したのですが、そんな災難も物ともせず、大津を満喫して、大津絵見立てで『仮名手本忠臣蔵』七段目の場面を描いたのが、本作です。

まず、この場面の粗筋を述べると、祇園一力茶屋の軒先で、顔世御前（＝浅野内匠頭の正室）からの密書を手に取る大星由良之助（＝大石内蔵助）に気付いた遊女のおかる（＝赤穂藩家臣の妻）が、二階から密書を鏡で写し見てしまいます。さらに、国家老でありながら敵に通じた裏切り者で、討入の動向を探る斧九太夫（＝大野九郎兵衛）が床下に潜んでいます。そして、おかるの存在に気付いた由良之助が、おかるに声をかけて身請け話をもちかけ（秘密を知ったおかるを後で亡き者にするため）、梯子を立てかけて彼女を二階から呼び降ろすのですが樺亭は、その梯子にヒントを得て、この場面を、「大津絵 外法の梯子剃り」に見立てています。即ち、「大星」を「大黒」に、「外法」を「おかる」にあて、同志のふりをして敵方に内通する「斧九太夫」を、心ない偽善者の象徴である「鬼の念仏」の鬼に配役して、七段目の状況を、適材適所の大津絵キャラクターに置き換えた訳です。さらに歌舞伎的な所作を大津絵キャラが見せる滑稽さを加えたところに、書替狂言さながらの見立てぶりが窺われます。ちなみに、大ヒット戯曲の『仮名手本忠臣蔵』の見立絵は、浮世絵版画を中心に多数にのぼり、「七段目」の見立絵もいくつもあります。その殆どが、文を見立ての小道具とした若衆と娘・妓女の色恋場面に置き換えられたものばかりです。男と女に注目せず、梯子に注目したところは、大津絵好きな紀樺亭ならではの発想といえましょう。ちなみに本作

は、通常「湖南九老」と落款する樺亭が、「大津九老」と類例のない署名をしています。大津の大津絵というアピールでしょうか。なお、大津では、樺亭の寓居から 600mほど東の四宮社（天孫神社）の北向かいに芝居小屋がありました。（横谷 賢一郎）

※本作については、『大津市歴史博物館研究紀要』第 22 号で詳述します。



大津絵 外法の梯子剃り 本館蔵



大津絵見立忠臣蔵七段目図